



Title	時間と生 : 行為主体にとっての時間
Author(s)	中山, 康雄
Citation	大阪大学人間科学部紀要. 1995, 21, p. 1-22
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9168
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

時間と生

— 行為主体にとっての時間 —

中山 康 雄

目 次

はじめに

1 『存在と時間』の批判的考察

2 行為主体にとっての時間

まとめ

時間と生

— 行為主体にとっての時間 —

中山 康雄

はじめに

拙稿 [16] において分析された「主観的時間」は、生きることに関する時間の側面を捉えているにすぎない。「主観的時間の分析」における「主観」は、印象を受け取る主体に他ならず、自分自身について語ることのできない、「自分」という概念を持たない主体であった。そこでは、絶え間なく現われる印象が線型順序を生みだし、追想により生まれる関連性のみがこの線型に並ぶ印象の間に内容的関連性を築きあげるとされた。しかし、これだけでは、生きることに関わる時間の記述としては不十分である。それでは、生きることに関わる重要な時間の側面とは何なのか？ それは、「行為主体にとっての時間の現われ方」である。

Husserl は、「客観的時間」を前提にせず、それから独立の主観的時間というものを記述しようとした ([7], [16] 参照)。また、McTaggart は、順序により記述される時間系列 (B 系列) と過去・現在・未来により記述される時間系列 (A 系列) を区別し、後者の方が根本的であると主張した ([15] 参照)。しかし、Husserl も McTaggart も、もっぱら認識主体にとり時間がいかに体験されるかという間に没頭していたのであり、行為主体にとり時間はいかに体験されるかという側面を見失っていた。この側面が、はっきりと現われてくるのが、Heidegger の『存在と時間』である¹⁾。Heidegger の記述は、時間と生の関わりの問題の核心にせまるものである。しかし、それはけっして十分なものではなく、多くの明らかな誤謬を含むものである。本稿の第1節では、Heidegger の記述を出発点にとりながら、その不十分性を明らかにするとともに、その主題である行為主体にとっての「過去・現在・未来の統一的関係」を論じたい。第2節では、行為の分析を通して行為主体にとっての時間の現われ方を明らかにしたい。この考察をおし、時間と生の関係をいくらかでも明らかにしていくというのが本稿のもくろみである。

1 『存在と時間』の批判的考察

『存在と時間』の一つの根本テーゼは、「人間が時間的存在者である」ということにある。そして、その中心にあるのが、私の言葉で次のように表現できる時間性の統一性のテーゼである。

(T1) 時間性の統一性のテーゼ

過去、現在、未来が並立しているという時間理解ではなく、未来から過去へという運動の中に自らの現在を位置づけるという時間の統一的理解が、我々自身がどのような存在者であるかということの理解の根本をなすものである。

このテーゼは、『存在と時間』§ 68 で時間性の脱自的統一性 (ekstatische Einheit der Zeitlichkeit) のテーゼとして展開されているものであり、「時熟は決して、脱自態の「継起」[Nacheinander]を意味しません。将来は既在よりも後れてはいないし、既在は現在よりも早くはありません。時間性は、既在的＝現前的な将来として時熟します」([6] § 68 p. 350, 邦訳下巻 p. 94) と表現されている。

Heidegger は、このテーゼの他に時間と人間の関係に関する数々のテーゼをたてている。その内、私の考察にとり重要なのは、「死」(Tod)、「通俗的時間概念」(der vulgäre Zeitbegriff)、「情態性」(Befindlichkeit)、「被投的投企」(geworfener Entwurf)に関する Heidegger の考え方である。この節では、これらの概念が因果と自己との関わりに深く関係していることを明らかにしたい。

Heidegger にとっては、時間は有限 (endlich)であり、「〈時間は「無限」である〉という通俗的な時間解釈の主要提言は…世界時間の水平化と蔽い隠しを」([6] § 81 p. 424, 邦訳下巻 p. 222) 明らかにしている。この「世界時間の水平化」は、「死からの逃避」にその根拠を持つとされる ([6] § 81 p. 424f, 邦訳下巻 p. 223 参照)。しかし、「通俗的な時間解釈」は、我々が通常持っている時計を用いて測っている世界についての時間であるという意味で、物理的時間である。そして、「物理的時間が有限であるか、無限であるか」という問は、哲学ではなく物理学が明らかにすべき問である。物理的時間がいかなるものであるかは、世界がいかなる物理的構造を持つものかという問題であり、我々の時間体験から導き出すことはできない。

私は、Heidegger の時間論を基礎存在論 (Fundamentalontologie) 構築のための一章としてではなく、「我々人間はいかに時間を理解し、その理解の内に生きているか」という問へのある解答としてここでは捉える。基礎存在論としての『存在と時間』は破綻している。そして、この破綻の理由は、哲学そのものにある。ギリシャ時代には可能だった、あらゆる学問の基礎としての哲学の役割りは、科学の進歩とともに失われてしまった。だから、現在、物理的時間の性質について語る時、哲学者は物理学者の言に従う以上のことはできない。

Heidegger は、人間は自らの死を経験できないと考える：「死において現存在のさまざまな

全体に達することは、同時に〈現〉[Da]の存在の喪失です。〈もはや現存在でないこと〉[Nichtmehrdasein]への移り行きは、この移り行きを経験し、かつ経験されたものとしてこれを了解する、という可能性からまさに現存在を除くのです。」([6] §47 p.237, 邦訳中巻 p.209 参照)しかし、人間は何故自らが他の生物や他の人々のように死ぬのだと考えるのか？自らの死は生きているかぎり経験不能であるのだから、我々はその存在を疑ってみることができる。それにもかかわらず、我々が自らの死を認めるのは、我々が因果の存在を認めるからにはかならない。Heidegger の実存的哲学の出発点となる「死への存在」(Sein zum Tode)という考え自体が、自分自身が束縛されているところの因果の容認を前提としているのである。まったく逆説的ではあるが、物理現象を関連づけている因果を、Heidegger の時間論の背後に、その記述の前提として私は読み取らざるをえない。

今までの考察に従い、Heidegger を批判する形で、死の因果性のテーゼを提案したい。

(T2) 因果のテーゼ

我々がいつか死なねばならない存在者であることは、我々が因果の列の中にまきこまれた生物の一つであることから帰結する。我々が「死に向かっての存在者」であることを引き受けるということは、我々が他の物体や生物と同様に因果的に束縛されている存在者であるということを認めることである。

因果のテーゼ (T2)は、生も死もある物理的プロセスの進行にほかならないことを主張している。「我々の死」とは、我々がこの因果の列の中に投げ入れられていることを象徴的に表現しているにすぎない。「死にまつわる有限性」は、我々自身が世界の物理的プロセスの一部にすぎないという世界に対する我々の限界性を象徴している。だから、それは時間の有限性を表現するものではなく、我々の生が時間の一部を占めているにすぎない、ということ表現している。人間は生まれ、成長し、年老い、そして、死ぬ。そして、この現象の背後にあるものは因果に基づいたある物理的プロセスの進行なのである。

Heidegger は、我々がいつもすでに気分づけられている者であると考え、この「気分づけられていること」(Gestimmtsein)を「情態性」(Befindlichkeit)と呼ぶ：「現存在という性格をもつ存在するものは、自分ではっきりしているかどうかは別として、被投性〔という状態〕において自分をみいだすという仕方、かれの現 [Da]なのです。そのような情態性において、現存在は、つねにすでに自分自身のまえにつれだされているということ、すなわち現存在はつねにすでに自分を見いだしていたということ、それも知覚しながら自分をみいだす [wahrnehmendes Sich-vorfinden]のでなくて、気分づけられた [gestimmtes][状態にある]自分をみいだす働き [Sichbefinden]としてです。」([6] §29 p.135, 邦訳中巻 p.24)

我々が因果の中に投げ入れられているということは、我々の身体のみが世界との因果関係にさらされているということの意味するのではない。そうではなく、我々の心的状態も外界から

の因果的影響にさらされているのである。Heidegger が、「気分は「外」からくるのでも「内」からくるのでもなく、世界・内・存在の仕方として、この存在そのものから立ち昇ってくるのです」〔6〕 § 29 p.136, 邦訳中巻 p.26) とか、「情態性は…開示性の実在論的根本様式」〔6〕 § 29 p.137, 邦訳中巻 p.27) であるとか言う時、彼は人間の存在構造の問題を前面に出し、世界と心的状態の因果的連関については言及しない。しかし、知覚、感覚、気分等の心的状態は、我々の意図を越えて世界と因果的に関わっている。我々は自らの感情に直接影響を与えない。我々は自分自身がある感情をもっていることを見いだすのである。私は、時に、うれしいと思うが、それは、自分がうれしく思おうとした結果としてうれしくなったのではない。そうではなく、私を喜ばせるような出来事が起こり、それが、私をうれしがらせるのである。

ここで「情態性」についての考察をまとめておく：

(T3) 心的状態についてのテーゼ

気分、感情等の心的状態は我々の意志により決定されるのではなく、外界との因果的関連により決定される。そして、我々は、時たま自分自身がそのようにして定められた感情や気分を抱えていることに気づくのである。

今まで我々は、自分自身が因果的影響をこうむる存在者であることにもっぱら注目してきた。しかし、我々は、行為主体として外界に因果的影響を与える存在者でもある。行為は、そもそも、ある目的達成をめざして世界に因果的影響を与えることにより、未来の世界状態がその目的を充足するように世界を改変する行動である²⁾。そして、行為の動機は、決意の時の自分のおかれている状況に関係する。我々は、ある心的状態に投げ入れられていると同時に、外界とのある物理的関係、そして、他の人々との社会的関係の中に投げ入れられている。だから、行為は、その行為に関する決意の時点での状況からある目的に向かって世界を改変することの企てである。行為主体であることは、人間であることのきわめて本質的な性質の一つである。

因果的に規定された現状況にあまみせず、与えられた制約を踏まえつつ新しい状況を生み出すよう行為することを「被投的投企」と呼ぶことが許されるだろう。Heidegger の言う「被投的投企」は、もともと、今陥っている場所から本来的な在り方を取り戻すための企てのことだと言えるだろう：「人間の〈完成〉[perfectio]すなわち人間がかれの最も自己的な諸可能性に向ってのかれの展けた存在(投企)において、かれが在りうるところのものに成る[werden]ということは、「関心」の「おこない」[Leistung]です。しかし関心は、この存在するもの[人間]が、配慮された世界に引渡されている(被投性)というかれの根本方式[Grundart]を、根源を等しくして規定しています。」〔6〕 § 42 p.199, 邦訳中巻 p.140f)

Heidegger は、おしゃべり、好奇心およびあいまいさという三性格において、「わたしたちが現存在の転落と名づけているところの、日常性の存在の根本様式が露われる」と言い、「現存在は、本来的な存在可能としてのかれ自身から、さしあたりいつもすでに脱落[ab-

gefallen]して、「世界」へ転落して」いると言う ([6] §38 p.175, 邦訳中巻 p.98)。しかし、何故、日常的であることと自分自身であることとは両立してはならないのか？ その理由は明らかではない³⁾。Heidegger の『存在と時間』における実存主義的な考察は、この非両立の前提に基づいている。したがって、この前提が崩れてしまえば、後半部の記述の多くのものが不適當になってしまう。私は、Heidegger が『存在と時間』を完結できなかった最も決定的な原因をこの誤った前提の内に見る⁴⁾。

もし、我々が今の自分の在り方を「本来的的」とであると考えたら、我々は本来的になるために行為することはないだろう。本来的であろうとして行為する理由は、今の状態が自分にとって欠如するものとして感じられる⁵⁾ ことにあるだろう⁶⁾。少なくとも、このような時、何もしないまま今ある状態にとどまっていることは自分にとり正しくないことだと思われるだろう。このように、「本来性」を求めることは、自分の未だないあるべき姿への到達を求めることである。そして、この求めは、自分の今いる状態が日常的であるかどうかには依存しない。それでも、自分のあるべき姿への到達を求めて行為することは「被投的投企」と呼べるだろう。それは、このような時、行為主体は、自分が投げ入れられている状況に満足せず、この状況にあるべきものに変えるために行為するからである。

これまでの行為に関する考えを次のようにまとめておく。

(T4) 行為に関するテーゼ

人間は、世界の中に位置し、因果的影響を外界からこうむる存在者であると同時に、行為することにより外界に因果的影響を与え、そのことにより世界を（ある範囲において）変えることのできる存在者である。ここで、因果的に決定された現状況において、その状況の改変のために行為することを「被投的投企」と呼ぶことにする。

Heidegger は、本来的在り方を未来との関係の中で捉える。このことは、「時間性は、根源的に将来から時熟します」([6] §65 p.331, 邦訳下巻 p.60) という Heidegger の言明に現われている。今、「本来的在り方」を「生きることの意味が完全に満たされている在り方」と捉えるなら、この「本来的在り方」は、未来に期待されるのみならず、過去、現在にも現われうるだろう⁷⁾。「本来的在り方」を未来に見る者は、それに向かって行為する者であったり、それへの到達不可能性に絶望する者であるだろう。また、現在の瞬間に自分が本来的に在ると感じる者は、恍惚や陶酔に我を忘れる者となるだろう。そして、過去に「本来的な在り方」を見いだす者は、回想する者となるだろう。そして、過去のある時点で自分があやまって判断したために「本来的在り方」に到達できなかったと思う者は、後悔者となるだろう。この中で行為する者だけが意図的に世界を改変しようとする者である。しかし、我々は、生きる中で、これらすべての「本来的在り方」の見え方を体験するのであり、それらすべてが我々の存在の仕方のある側面を形成している⁸⁾。

2 行為主体にとっての時間

行為主体としての我々は時間をどのように理解し、時間とどのように関わっているのか？この節では、Hans Kamp により1980年代始めに提唱されたディスコース表示理論⁹⁾(DR理論)を用いて行為を記述することにより、この間に答えることにする。

2.1 単純ディスコース表示構造

行為について語るためには行為者の意図の内容を表現する枠組みが必要となる。私は、このような枠組みとして、DR理論を用いることにする。また、DR理論による記述にあたって、出来事も対象(entity)として捉えることができるというDonald Davidsonの出来事論のテーゼを前提として用いることにする¹⁰⁾。

DR理論は、ディスコース(談話)の表示として、ディスコース表示構造(DR構造)を定義する。DR構造は、世界の部分を記述する構造である。行為を記述するという目的のためには、当面、最も単純なDR構造だけが必要となる。理論を複雑にしないため、ここでは、この単純なDR構造を「単純DR構造」と呼び、この構造のみを使って考察することにする。単純DR構造は次のように定義される。

(D1) 単純DR構造の定義

$K = \langle U, COND \rangle$ が、次の条件を満たす時、単純DR構造と呼ぶ。

- (1) $x, x_1, \dots, x_n, \dots, e, e_1, \dots, e_k, \dots, t, t_1, \dots, t_n, \dots, i, now$ を「指示標識」(reference marker)と呼ぶことにする。
- (2) s が、固有名または指示標識である時、 s を「項」(term)と呼ぶことにする。
- (3) U は指示標識の集合である。
- (4) $COND$ の要素は、 $s_i = s_j$ あるいは $R(s_1, \dots, s_k)$ という形の条件である。

ただし、 $s_1, \dots, s_k, s_i, s_j$ は項とし、 R は k -項の関係語とする。

(単純DR構造 $\langle U, COND \rangle$ は U 中の指示標識が代表している対象について $COND$ の内の条件がすべて満たされているということを表現している。例えば、 $\langle \{x_1, x_2\}, \{R_1(x_1), R_2(x_2), R_3(x_1, x_2)\} \rangle$ は x_1, x_2 が代表している対象について $R_1(x_1)$ かつ $R_2(x_2)$ かつ $R_3(x_1, x_2)$ ということが成り立つということを表現している。)

単純DR構造 K がある構造 M で真になるのは、 K が M の正しい描写とみなしうる時である。つまり、 K が M で真なのは、 K を M にうまく重ね合わせることができる時、言い換えれば、 K から M への適切な埋め込み関数が存在する時である。

(D2) 単純DR構造に関する「真理」の定義

(以下の定義におき、「 $A \Leftrightarrow_{\text{def}} B$ 」は「 A は B のように定義される」ということを意味するとする。)

(1) $K = \langle U_K, \text{COND}_K \rangle$, $M = \langle U_M, F \rangle$ とし、 F は解釈関数とする。この時、

U_K から U_M への写像 f は K を M において真にする $\Leftrightarrow_{\text{def}}$

f は次の条件を満たす：

(A) x_i が指示標識ならば、 $I(x_i) = f(x_i)$, s_j が固有名ならば $I(s_j) = F(s_j)$ と項の解釈 I を定義する。

(B) すべての COND_K の要素となる条件 X につき、次のことが成り立つ：

(i) X が $s_i = s_j$ という同一言明の時、 $I(s_i) = I(s_j)$ 、

(ii) X が $R(s_1, \dots, s_k)$ という条件の時、 $\langle I(s_1), \dots, I(s_k) \rangle \in F(R)$ 。

(2) K は M において真である $\Leftrightarrow_{\text{def}}$

K を M において真にするような U_K から U_M への写像 f が存在する。

後の議論に必要なため、単純DR構造の拡張と部分について定義しておく。単純DR構造 $K1$ が $K2$ の拡張であるということは、 $K2$ を $K1$ の中にそっくり入れ込むことができるということである。

(D3) 行為構造の「拡張」と「部分」の定義

$K1 = \langle U_1, \text{COND1} \rangle$, $K2 = \langle U_2, \text{COND2} \rangle$ とする。

(A) 単純DR構造 $K1$ は単純DR構造 $K2$ の拡張である $\Leftrightarrow_{\text{def}}$

U_2 から U_1 への単射 π が存在し、 COND2 のすべての条件 X について次のことが成り立つ： X が COND2 の条件ならば、 X 中に現われる指示標識 s_1, \dots, s_k を $\pi(s_1), \dots, \pi(s_k)$ で置き換えることによりえられる条件は COND1 の条件である。

(B) 行為構造 $K1$ は行為構造 $K2$ の部分である $\Leftrightarrow_{\text{def}}$

行為構造 $K2$ は行為構造 $K1$ の拡張である。

2.2 ディスコース表示理論と出来事の記述

Arthur Danto は [4] におき、物語 (narratives) を分析する過程で出来事や行為の問題を扱った。Danto の分析の特徴は、出来事や行為が物語という枠組みの中に現われてくることにある。Danto によれば、「物語文は、少なくともふたつの時間的に離れた出来事を指示し、そのうちの初期の出来事を記述する」([4] Chap VIII p.159, 邦訳 p.194)。そして、彼は次のように続けて言う：「しかし、この構造はまた、ある意味で通常行為を記述するのに用いられるすべての文に現われている」([4] Chap VIII p.159, 邦訳 p.194)。さらに、Danto は、「船

を建造する」、「ばらを植える」、「ラジオを修理する」等の例をあげながら、「行為の述語は、非常に柔軟な規則にしたがっている。漠然とした多くの種類の行動が、「船を建造中」という表現にとり込まれるのである」〔4〕Chap VIII p.160,邦訳 p.194)と語る。彫刻を刻んでいる人が、「私は船を建造しているところです」と言い、穴に種をまいている人が「私はばらを植えているところです」と答え、ねじを回している人が「私はラジオを修理しているところです」と語る。このような行為の記述の問題を明らかにするために、Danto は、企画動詞 (project verb) という語を導入する：「 R を任意の結果、 E は R をもたらすためになされる任意の行動と仮定しよう、その場合ある人の行なっていることは、 E または R のいずれかによって記述される。したがって「 a は R しつつある」は、 a が E を行ない、 E が R の手段であるとき、 a が行なっていることについての正しい記述となる。だが実際には「 R しつつある」(is R -ing)は一般に、 $B_1 \cdots B_n$ にわたるさまざまな行動の全範囲をおおっていて、その結果「 a は R しつつある」が真であるとき、 B_i がこの範囲内的一项であり、 B_i していることが a が行なっていることの字義通りの記述であるさいには暫定的に a は B_i していると想定してもよい。」〔4〕Chap VIII p.160,邦訳 p.195)

a が R という結果を達成しようと思っているとしよう。そして、 a が R という結果を得るために B_1, \dots, B_n をなさねばならないと思っているとしよう。この時、 a は R を達成するために B_1, \dots, B_n の行動を行なうだろう。このことは、次の二つの単純DR構造 $KR1$ と $KR2$ を用いて表わすことができる：

$$KR1 = \langle \{e\}, \{R(e)\} \rangle$$

$$KR2 = \langle \{e, e_1, \dots, e_n\}, \{R(e), B_1(e_1), \dots, B_n(e_n), e_1 < e_2 < \dots < e_n < e\} \rangle$$

つまり、 a は $KR1$ を未来において真となるようにするために、その拡張である $KR2$ を未来において真となるように行動するのである¹¹⁾。また、 a が $KR2$ を真にしようと行動している時、その時点 T とするなら、 $R\text{-ing}(a, T)$ は真となる。

行為はある目的をめざして行なわれるのであり、物語文が持つとされる少なくとも二つの時間的に離れた出来事を指示するという特徴は、現在行なわれていることがらと行為の目的という関係づけから現われてくる。

2.3 行為構造

前節で見たように、単純DR構造を用いて行為を表現することができる。行為の記述のために使用される単純DR構造を行為構造と呼ぶことにしよう。

(T5) 行為のテーゼ

今、 $t \leq t^*$ 、 M_t は時点 t における過去と現在の全情報を含んだモデル、 M_{t^*} は時点 t^* における過去と現在の全情報を含んだモデルとする。この規定により $M_t \subseteq M_{t^*}$ (「 M_t は M_{t^*} のサブモデル」) が成り立つ。この時、次のことが成り立つ：

a が行為する時、次の条件を満たすある単純DR構造 K が存在する：

a は、 M_t において K が真となるよう行動しようと現時点 t において思っている。

このように、ある行為主体 a がある単純DR構造 K が真となるよう行動する時、 K を「 a の行為構造」と呼ぶことにする¹²⁾。

例えば、「スイッチ S を押し、部屋 R の電灯をつける」という行為に対応する行為構造は次のものである (i は、行為主体を表わす指示標識とする。即ち、 $f(i)=[KI$ の行為主体] が成り立つことが KI に関する埋め込み関数 f に要請される)：

$$KI = \langle \{i, x_1, x_2, x_3, e_1, e_2\}, \{ \text{スイッチ}(x_1), x_1 = S, \text{押す}(e_1, i), \text{を}(e_1, x_1), \text{部屋}(x_2), x_2 = R, \text{電灯}(x_3), \text{中}(x_3, x_2), \text{つく}(e_2, x_3), e_1 < e_2 \} \rangle$$

(KI は、「私がスイッチ S を押し、その後、部屋 R の中の電灯がつく」ことを表現している。)

行為主体がある行為構造が真となるよう行動することができるのは、彼が行動により世界に因果的影響を与え世界の状態を変えることができるからである。

行為は、ある目的を持った行動であるが、この目的とそれに達するための戦略は、行為構造を用いて記述できる。そして、ある行為構造を作成するためには、その実現の可能性を高めるために、関連することがらに関する因果についての知識が大幅に使用されねばならない。

今、過去における出来事表現する単純DR構造を物語構造と呼ぶことにする。この時、行為構造は物語構造とその構造記述に関して基本的に同じものとみなすことができる。両者の違いは、唯一、この構造が世界といかに関わっているかにある。今、現在までの世界モデルを M_t と呼ぶとしよう。この時、物語構造 KS は M_t におき真か偽である。 KS が M_t について真なのは、 KS が世界モデル M_t を正しく記述している時である。これに対し、行為構造 KA は、未来を含んだ世界モデルに写像されるものであり、行為主体は KA が未来において真となるよう行動しようと意図するのである。そして、 KA が実際に実現されたなら、 KA は未来のある時から見て真となる物語構造となっている。 a がスイッチを押し電灯をつけようと行動し、この行為が成功したなら、「 a はスイッチを押し電灯をつけた」という言明はその行為の後の時点から見て真となっている。

また、Danto が指摘するように行為はある一人の個人によってではなくある集団によってなされる時がある。Danto は、「大量生産の工場のように「 R しつつある」が、範囲内部のひとりの事柄を行なっているような一団の人々に、無差別に当てはまるという場合もあろう」 ([4] Chap VIII p.161, 邦訳 p.195) と言う。このような集団による行為も行為構造により記述することができる。「船を建造する」という例でこのことを見てみよう。

$KR3 = \langle \{x, e\}, \{ \text{船}(x), \text{完成する}(e, x) \} \rangle$ は、船を建造する時の行為構造である。船の建造に携わっている a_1, \dots, a_k は、それぞれ $KR3$ が真となるよう行動しようとすることになる。この時、 B_1, \dots, B_k の仕事の分担がひとりひとりにされたら、 B_i の仕事を割り当てられた a_i の行為構造は次の $KR3_i$ で表わすことができる： $KR3_i = \langle \{x, x_i, e, e_i\}, \{x_i = a_i, B_i(e_i, x_i), \text{船}(x),$

完成する(e, x), $e_i < e$)。

このような行為構造 $KR3_1, \dots, KR3_k$ を融合して得られる単純DR構造 $KR3^*$ は、船の建造のための分業の作業行程を全体的に表わすものとなる。また、具体的に作業を進めるためにはそれぞれの職人 a_i が各々の行為構造 $KR3_i$ を拡張により細密化しなければならない。また、「時点 T までに船を建造する」というという期限付きの船の建造計画も $\langle \{x, e\}, \{船(x), 完成する(e, x), e < T\} \rangle$ という行為構造により表現することができる。

2.4 行為と因果

「部屋 R を明るくする」、「部屋 R の電灯をつけ、 R を明るくする」、「スイッチ S を押し、部屋 R の電灯をつけ、 R を明るくする」という三つの文に対応する行為構造について考えてみよう。これらの行為構造を、順に $KA1, KA2, KA3$ と呼ぶと、 $KA3$ は $KA1$ と $KA2$ の拡張に、 $KA2$ は $KA1$ の拡張になっていることがわかる。この時、ある行為主体 a が、スイッチ S を押すことと部屋 R の電灯がつくことに因果関係を見、部屋 R の電灯がつくことと R が明るくなることとの間に因果関係を見るならば、 a はスイッチを押した後、部屋 R が明るくなることを期待し、部屋を明るくするという目的到達のために他の何の行動も起こさないだろう¹³⁾。このように、行為主体は、世界の因果関係についての自分の信念を行為遂行において利用する。このような行為主体の信念は、ある目的到達のためにどのような行為構造を組み立て、どのような拡張を施すのかに影響を与える。

行為構造は、多くの時、拡張により細密化することができる。「スイッチ S を押す」という文に対応する行為構造は、例えば、ある状況のもとで、「数歩歩いて、右手を壁のスイッチ S のところにおき、親指で S を押す」と細密化できるかもしれない。このように、行為構造を細密化していくことにより、行為を（それぞれの状況において）基本的行動の複雑な複合体として分析することができる。実際、行為主体がある行為を遂行できるのは、その行為を彼に可能な基本行動に分解できるからである。そうでなければ、行為主体は、ある行為を遂行するために、その時々何をしたらよいかわからなくなるだろう。

すべての行為が、ある目的を達成するために行動した後は結果が現われるまで待っていればよいという性質のものであるわけではない。例えば、職場からバスに乗り家に帰る場合、家に着くまで行為主体は目的を達成するために行動し続ける。

また、すべての行為が、その行為をはじめるときに、計算しつくされているものではない。行為をはじめるときには、その最初の部分が明らかになっていれば、行為遂行の途中においてまわりの状況を判断しながら次の行動についての計画を立てることができる。

そして、また、我々はしばしば、成功の確信なく自分の行動が無駄になるかもしれないことを覚悟で行為する。このようなタイプの行為には、決断が必要となる。我々は、自分の能力の限界や状況把握の不完全性からくる失敗の可能性を自覚して、それでも成功の可能性に賭けることになる。

このように、行為遂行には様々なパターンがある。しかし、我々が行為のテーゼ (T5) で述べた、ある行為構造を真にしようと行動するという特徴は、ここでも満たされている。

2.5 行為のコンテキスト

行為構造の分析は、現在を行為のコンテキストに位置づけるために必要となる。ある行為構造 K に従い行為する主体は、 K 中に現われる出来事のうちのどれがすでに実現され、次にどれが実現されねばならないのかを知らねばならない。つまり、行為主体は現在が K の中でどこに位置しているかを知らねばならない。

第2.2節の例をとれば、 B_1, B_2 がすでに実現されていれば、行為主体は部分的に実現している行為構造 $KR2^*$ を自覚することにより次の実現すべき過程 B_3 に進むことができる (下の $KR2^*$ の記述におき、 now は現時点を表わす指示標識とする。即ち、 $KR2^*$ に関する埋め込み関数 f は「 $f(now) = 現時点$ 」を満たさなければならない、という制約を課すことにする) :

$$KR2^* = \langle \{e, e_1, \dots, e_n, now\}, \{R(e), B_1(e_1), \dots, B_n(e_n), e_1 < e_2 < \dots < e_n, e_2 < now, now < e_3\} \rangle$$

つまり、 $U_{KR2^*} = U_{KR2} \cup \{now\}$ かつ $COND_{KR2^*} = COND_{KR2} \cup \{e_2 < now, now < e_3\}$ が成り立つ。

多くの場合、現在は複数の行為のコンテキストに関係づけられ、位置づけられている。「あなたは何をしていますのですか」という問に、我々は、多くの場合、複数の答えを与えることができる¹⁴⁾。それは、我々が複数の行為のコンテキストに関連づけて現在を見ているからである。

現在が複数の行為のコンテキストに位置づけられるなら、自分の今の行動がある行為の遂行のためにはよくても、他の行為の遂行のためには望ましくないかもしれない。このような「矛盾」は、日常、常に起こりうる。そして、時として、我々は、他の行為遂行を優先させるために、予定していた行為のいくつかの遂行をあきらめねばならない。

複数の行為の実現のために我々は様々な調整を行なうことができる。例えば、今日までの期限付きの行為計画、明日までの期限付きの行為計画、特定の期限のない行為計画に対応する行為構造 $KT1, KT2, KT3$ を考えよう。この時、 $KT1, KT2, KT3$ の整合的融合が可能ならば、この三つの行為計画は基本的に遂行可能なことを示している。このような時、我々は、まず、今日の間は $KT1$ の実現を優先し、その後、明後日までは $KT2$ の実現を $KT3$ に優先すべきだと考えるだろう。このような調整が必要な場合は、各々の行為構造の実現をその都度試みるよりも、 $KT1, KT2, KT3$ のそれぞれの拡張となる $KT4$ という行為構造を構成し (つまり、「 $KT4$ は $KT1, KT2, KT3$ の拡張である」が成り立つ)、 $KT4$ の実現に努めることの方が、より確実に考えぬかれた行為遂行となるはずである。

2.6 行為と行為の記述

Davidson は、一連の論文の中で行為と行為の記述を区別すべきことを主張した([5]参照)。その理由は、行為にともなう行為主体の意図が内包的に解釈されねばならないことにある：「かくして、論理的観点から述べるならば、意図を導入する表現と支配する重要な条件として次のようなものが存在するということになる。すなわち、その表現は行為を表わす動詞として解釈されてはならず、内包的 (intensional) でなければならず、そして、意図は人格をもった人間に結びつけられねばならない、ということである。」([5] Chap. 6 p.122, 邦訳 p.157)

Davidson は、「 x について p ということは意図的であった」(It was intentional of x that p) という形式の言い回しを意図の表現に使用することを提案する ([5] Chap. 6 p.122, 邦訳 p.157 参照)。ただし、ここで「 x 」は行為者を名指し、「 p 」はその行為者が何ごとかを行なったということを述べる文とする。Davidson は、また、自分が誰であるかという点について行為者が誤りを犯している場合に何が起るかをこの言い回しの使用により表現できるとし、次の例をあげる：「たとえば、オイディプスがライオスの殺害者を捜したということはオイディプスについて、したがってライオスの殺害者について意図的であったが、ライオスの殺害者がライオスの殺害者を捜したということはオイディプスについて、(すなわちライオスの殺害者) について意図的ではなかった。」([5] Chap. 6 p.122, 邦訳 p.157)

私は、文を用いたこのような Davidson の意図の分析には限界があると思う。これに対し、私が本稿で提唱したのは、行為の分析に行為構造を用いることであった。それは、一つには、行為は文で表現しがたい複雑な構造を持つこともあると考えるからである。しかし、さらに重要な問題は、行為主体の意図の内包性に関わる問題である。

Castañeda が指摘し、Davidson もその指摘の妥当性を認めたように、オイディプスに関する意図された行為は、オイディプスが自分の名前を知らない場合も考慮して、「オイディプスにとっては、彼がライオスの殺害者をさがしたことは意図的であった」([5] Chap. 6 p.127, 邦訳 p.157 参照) と表現されるべきである。しかし、「意図する」というような語は、内包的な領域を生み出すので、「 $\exists x$ (意図する(オイディプス, $p(x)$) \wedge $x =$ オイディプス)」のような論理式を解釈する時、様々な問題が現われる。このような命題的態度については、Quine や Kripke がパラドックスを指摘している ([13], [20] 参照)。Asher や Kamp は、このような命題的態度の問題について DR 理論を用いた解決法を提案している ([1], [2], [9] 参照)。DR 理論では、構造 M において同一の物が、DR 構造においては二つ以上の指示標識により表現されるような場合も許されている。それは、DR 構造は、聞き手が構成する話の内容の構造を表現しようとしているからであり、この場合、聞き手は、現実には同一なものが二つの別の語で表現されていれば、二つの物と受け取る可能性が残されているからである。「オイディプスはライオスの殺害者をさがす」という行為の記述は、我々の分析に従えば次のようになる：

オイディプスは行為構造 $KD2$ が構造 M で真になるよう行動する。ただし、この時、 $KD2 = \langle \{i, x_1, x_2, e_1\}, \{x_1 = \text{ライオス}, \text{殺害者}(x_2, x_1), \text{見つける}(e_1, i), \text{を}(e_1, x_2)\} \rangle$ とし、 $KD2$ を M で真にする埋め込み関数 f は「 $f(i) = \text{オイディプス}$ 」という制約を満たすとする（ここでは、「さがす」は「見つけることが実現されるよう行動する」とことと解釈している）。

この時、オイディプスがライオスの殺害者であること「殺害者(オイディプス, ライオス)」は M で真ではあるが、 $KD2$ はこの情報を含んでいないため、オイディプスは彼自身を見つけることが真となるよう行動しているわけではないことになる。

この節の考察で示されたように、DR理論は意図の全体的関わりや態度の表現にすぐれている枠組みを提案しており、他の形式的枠組みと比べて行為の分析のための適切な道具であることがわかるのである。

2.7 行為主体にとっての時間の現われ方

最後に第1節と第2節の議論を踏まえ、行為主体にとっての時間の現われ方について考えてみよう。

第1節では、人間存在の被投性を人間が因果の束縛の中に投げ入れられていることと分析した。しかし、行為は、自分が因果に束縛されていることを捉えながら因果的影響をおよぼすことにより世界を変えるものである。第2節で記述した行為構造の拡張による細密化は、世界の因果に関する行為主体の信念を前提にしている。つまり、世界の因果に対する妥当な把握や現状の正しい把握なしには実現可能な行為構造を構成することができない。行為を企てるという試みにおいて、行為主体は、経験によって築いた彼の信念に依拠しているのである。

第2節の分析によれば、我々が行為主体であるということは、我々が現在を行為構造の中に位置づけているということを含んでいる。そして、中間目的が達成されることによりある行為構造における現在の位置づけは変わってくるのだから、我々は、常に現状に合わせて行為構造と現在の関係を新しく位置づけなおさねばならない。そして、このような時、行為構造の一部は未来に、そして、他の一部は過去の世界に関係づけられている。つまり、行為主体にとっての時間体験は、様々な出来事が一定に未来から過去へと通り過ぎていくというものではない。そうではなく、行為主体にとっての関心事は、行為構造の中のまだ実現されずしてある起こるべき出来事を生起させることにあり、その意味で、彼は未来に関わり、未来の世界の在り方についてそれを決定する一因子として存在している。だから、彼にとっては、特定の未来の出来事が重要なのであり、他の多くの出来事の生起にはほとんど関心をはらわない。そして、このような行為主体にとっての時間への関わり方が、第1節で時間性の統一性のテーゼとして (T1) により表現されたものなのである。

ところで、我々は何故行為しようとするのだろうか？ それは、我々が「充足された状態」

を未来の方向に見るからだろう¹⁵⁾。「充足された状態」というものに各個人が何を見るかは、その時々で異なるであろう。例えば、咽が渇いているという状態を考えてみよう。私は、咽を潤すことを想像することにより咽の渇きを克服できない。むしろ、水を飲むことにより、その因果的結果として咽の渇きをいやすという方法に訴えるだろう。それは、私の心的状態が外界と因果的に関連しているからである。そして、この時、この行為に関わる「充足された状態」とは、咽が潤っているという充足された状態である。このように捉えるなら、「充足された状態」を欲することは、Davidson が賛成的態度 (pro attitude) と呼んだものに属するある態度と認められるだろう ([5] Chap. 1 p.5, 邦訳 p.5 参照)。こう考えるなら、何をするかは、何を「充足された状態」と認めるかにしばしば関わってくることになる。「本来的在り方」は、この「充足された状態」の特別な場合として考えることができるかもしれない。一般に、状態 $s1$ を欲することは、状態 $s2$ を欲するための手段となることができる。しかし、ある欲せられた状態 s があり、それが、他の手段としてではなく、純粹にその状態ゆえに欲せられているということがあるだろう。この時、この状態 s に達することは、行為の目的となるが、この目的は、手段を有しても、それ自身は手段となることのない特別な目的となる。この種の欲せられた状態を「本来的在り方」と呼ぶなら、それは、生きていく中での諸行為をそれへの到達手段として正当化し、諸行為に統一の意味を与えるものとなるだろう。

まとめ

本稿では、行為主体にとって時間はどのように体験されるのかという問題に答える形で、時間と生の関わりを論じた。第1節では、Heidegger の時間論を批判しながら、時間の統一性を行為主体にとっての時間の現われ方として示すことを試みた。行為する主体は、自らが因果の列に投げ込まれていること、自らの行動能力も過去の経験により規定されていることを認めつつ世界を改変するために行動する主体である。つまり、行為は、因果と結びついた「被投的投企」であるとも言える。この分析は、Heidegger の日常性と「本来性」の非両立のドグマを拒否し、改めて、「本来的在り方」と行為との関係について考察することを試みたものである。

第2節では、DR構造を用いて行為の分析を行なうことにより、行為主体と世界との関係を明らかにしようとした。DR理論を用いて行為の分析を行なうことにより、遂行のコンテクストに重点をおいた行為分析が展開された。行為を遂行するためには、現在を行為構造の中に正しく位置づけなければならないというテーゼから、我々は再び第1節の時間の統一性のテーゼに戻ることができた。

認識主体にとって、(出来事列としての) 時間は未来から過去へ向かって流れる。しかし、行為主体は、行為構造を作成することにより「未来を先取り」する。そして、その「先取り」された行為構造の中に過去と現在を正しく位置づけることにより行為遂行ははじめて可能になる。だから、生きる主体としての我々にとって、認識主体としての時間の現われ方のみならず、

行為主体にとっての時間の現われ方が根本的となるのである。

注

- 1) McNerney も、Heidegger の時間論を行為の問題と関係させて論じている ([14] 第6章、参照)。
- 2) この目的が満たされるよう世界を改変することとしての行為は、第2節において詳しく分析される。
- 3) 「本来的な投企」と「非本来的な投企」の区別の不毛性に関する指摘は、Sartre にも現われる：「したがって、死の前における不安、断乎たる決意または非本来性への逃亡などは、われわれの存在の根本的な企てとは見なされえないであろう。むしろ反対に、それらのことは、生きるというこの原初的な企て、すなわちわれわれの存在の根原的な一つの選択を、根拠としてしか理解されえないであろう。それゆえ、本来的な投企のいずれの場合にも、ハイデッガー的な解釈学の諸結果を、さらにいっそう根本的な一つの企てへ向かって、超出することが肝腎である。」([22] 邦訳Ⅲ巻 p.296)
- 4) この「日常性」と「本来性」の非両立のテーゼは、時間概念を「本来的」なものと「非本来的」なものに分裂させる。Ricoeur の Heidegger 批判も、この問題を根本的なものとして捉えている：「さらに問題とすることができるのは、最初から時間性の分析に押されてきた、このきわめて独特の実存的刻印が、第二篇の現存在と時間とについての最後の二つの章でなされる、時熟の位階化の企てに、非常に重大な結果を及ぼすのではないか、ということである。つまり、歴史性と時間内部性とを根本的な時間性から派生させようとする意図に反して、実際には、死すべき時間と歴史的時間と宇宙的時間とのあいだの通約不可能性から、時間概念の新たな分散がうまれることになる。」([21] 邦訳Ⅲ巻 p.118)
- 5) ここでは、実際に欠如しているということが問題なのではなく、欠如しているという信念を持っているかどうかの問題なのである。
- 6) これと同じ議論は、『存在と無』における Sartre にも現われる：「自由は、自己の投企する目的によって規定される。いいかえれば、自由は、自分があるべきところの未来によって、規定される。けれども、未来はまさしく「現にあるところのもの、いまだ-あらぬ-状態」であるから、未来は、現にあるところのものではありえないであろう。なぜなら、現にあるところのものは、欠如であり、したがって、そこに何が欠けているかということから出発してでなければ、それは欠如として認知されえないからである。」([22] 邦訳Ⅲ巻 p.153)
- 7) 「本来的在り方」の一つの捉え方は、それが、本質的に未来に期待されるもので、現在化されえないものである、というものである。『存在と無』において、Sartre は、人間を「欠如者」として捉え、「本来的在り方」を未来に求め続ける者として考える：「人間は、根本的に、存在欲求 *désir d'être* であり、この欲求の存在は経験的な帰納によって確かめられるはずはない。この欲求の存在は、対自の存在についての *ア・プリオリ* な記述から引き出される。というのも、欲求は欠如であるからであり、対自は、自己自身に対して自己自身の存在欠如であるような存在であるからである。」([22] 邦訳Ⅲ巻 p.298)
- 8) ここでの考察は、木村敏著の [11], [12] から触発された。木村は、精神病理をアンテ・フェストゥム、ポスト・フェストゥム、イントラ・フェストゥムという三つのタイプに分けている。これらの三つのタイプは「祭の前」、「祭の後」、「祭のさなか」という意味に対応し、「分裂病の時間」、「鬱病者の時間」、「狂気の時間」という三つの精神病理に対応していると言う。ここで、「祭」を「本来的在

り方」と見ることができるだろう。そこから、「本来的在り方」を未来・過去・現在に見る時間への関わり方の三つの様式が生まれる。「本来的在り方」を未来に見て行為する場合、行為を成功させるためには、正しい現状把握と適切な行為構造の構築が必要になる（行為構造については、本稿第2節を参照のこと）。また、「本来的在り方」を過去に見る者は、行為しても、その行為が何のためになされたのかについて自らの可能性と関連させて説明ができないだろう。そして、「本来的在り方」を現在に見る者は、過ぎ去っていく出来事は重要でなくなり、陶酔の継続としての現在の永続を感じるだろう。常人としての我々は、これら三つの「本来的在り方」の見え方をそれぞれ経験し、それらの間の均衡の上に生きていると言えるだろう。

- 9) DR理論は、Kamp が [8] において提唱した。その後、この理論は拡張されている ([3], [10] 参照)。DR理論の推論体系は、[23] 等に定義されている。また、DR理論を用いての拙論には、[17], [18], [19] がある。入門には [10] と [25] が適している。本稿においては、DR理論の最も簡単な部分しか用いない。
- 10) Davidson の出来事論については [5] を参照せよ。また、出来事を対象として表わす仕方はDR理論においては標準的である。[3] には、様々な種類の対象についての議論が詳しくなされている。
- 11) $KR1 = \langle \{e\}, \{R(e)\} \rangle$ が構造 M で真であるとは、定義 (D2) に従えば、 $KR1$ から M への適切な埋め込み関数 f が存在する時である。この時、 $KR1$ が M で真であるのは、 $\exists e R(e)$ が M で真になる時であることが帰結する。
- 12) ここで提案した行為の分析は、言語行為の分析にも用いることができるかもしれない。Searle は、[24] における発語内行為 (illocutionary acts) の分類にあたり、「語から世界へ」(word-to-world) 「世界から語へ」(world-to-word) という適合方向を区別する。発語内行為は、[24] によれば、主張型 (assertives)、指令型 (directives)、行為拘束型 (commissives)、表現型 (expressives)、宣言型 (declarations) の5種類に分けることができるが、この内、指令型と行為拘束型は世界から語への適合方向を持つとされる。指令型の発語内行為である命令においては、発話された命題内容が充足されるよう行為することが聞き手から要求される。また、行為拘束型の発語内行為である約束においては、発話された命題内容が充足されるよう行為することを発話者自身が聞き手に対して保証しようとする。つまり、「世界から語へ」という適合方向は、行為主体が行為構造の内容にあうよう行動するという行為の性質から生ずるものと解することができる。この時、発話された命題内容は行為構造に相当すると考えることができる。実際、命令や約束は多数の文を用いてしか表現できない複雑なものである場合もある。そのような複雑な発話連鎖の内容を表わすには、述語論理における論理式ではなく、DR構造が適している。
- 13) Davidson 等の分析哲学における行為論は、最初から明確に把握できる因果関係を用いての行為についての分析が中心をしめているように思われる。しかし、これは、行為のタイプの一つにすぎない。また、これらの行為論は、「過去形」で語られる行為を問題にしている。つまり、そこでは、成立した行為についていかなる分析が可能かについて論じられ、「ある主体が行為する」ということはいかなることかという、「主体の未来に向かっての行為遂行」は主要な分析の対象ではない。本稿の第2節は、この「主体における行為」の分析を試みるものである。
- 14) このことは、Danto も、部分的にはあるが、述べている。穴にバラの種をまいている人は、「何をしているのですか」と聞かれて、「バラを植えています」とも「種をまいています」とも答えるだろう ([4] Chap VIII p.160, 邦訳 p.195 参照)。この時、バラを植えるということの行為構造のある拡張は、種をまくということの行為構造を部分として含むようなものになるはずである。しかし、

一般には、現在していることと直接関連のないように思われる返答を与えることもできる。例えば、種をまいているという同じ状況において、「ある哲学の論文を書いているところです」とも答えることができる。返答において、我々は、聞き手の関心がどこにあるのかを推測し、今実現をめざしている行為構造の中から適切と思われるものを選んで答えるだろう。

- 15) このことは、注7で引用した Sartre の言明と一致する。

参考文献

1. Asher, N. (1986) "Belief in Discourse Representation Theory" in: *Journal of Philosophical Logic* 15(2): 127-189.
2. Asher, N. (1987) "A Topology of Attitudinal Verbs and their Anaphoric Properties" in: *Linguistics and Philosophy* 10(2): 125-197.
3. Asher, N. (1993) *Reference to Abstract Objects in Discourse*, Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
4. Danto, A. (1965) *Analytical Philosophy of History*, The Cambridge University Press. ただし、引用は次のものによる: Danto, A. (1985) *Narration and Knowledge*, New York: Columbia University Press. (邦訳、河本英夫訳 『物語としての歴史』(1989) 国文社)
5. Davidson, D. (1980) *Essays on Actions and Events*, Oxford: Clarendon Press. (邦訳、服部・柴田訳 『行為と出来事』(1990) 勁草書房)
6. Heidegger, M. (1927) *Sein und Zeit*, (参照ページは、1977年出版、Tübingen: Maximeyer Verlagの版のもの) (邦訳、桑木務訳 『存在と時間』(1960-63) 岩波書店)
7. Husserl, E. (1928) *Vorlesungen zur Phänomenologie des inneren Zeitbewusstseins*, in: *Jahrbuch für Philosophie und phänomenologische Forschung*, Bd. IX, pp. 367 - 498. (邦訳、立松弘孝訳 『内的時間意識の現象学』(1967) みすず書房)
8. Kamp, H. (1984) "A Theory of Truth and Semantic Representation" in: J. Groenendijk, T. Janssen, & M. Stokhof (eds.), *Truth, Interpretation and Information: Selected Papers from the Third Amsterdam Colloquium*, Dordrecht: Foris.
9. Kamp, H. (1990) "Prolegomena to a Structural Theory of Belief and Other Attitudes", in: C. A. Anderson and J. Owens (eds.), *Propositional Attitudes*, CSLI lecture notes no. 20.
10. Kamp, H. & Ryle, W. (1993) *From Discourse to Logic*, Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
11. 木村敏 (1981) 『自己・あいだ・時間』 弘文堂
12. 木村敏 (1982) 『時間と自己』 中公新書 674.
13. Kripke, S. (1979) "A Puzzle about Belief" in: A. Margalit (ed.) *Meaning and Use*, Dordrecht: Reidel. Also in: N. Salmon and S. Soames (eds.) *Propositions and Attitudes*, Oxford: Oxford University Press, 1988.
14. McInerney, P.K. (1991) *Time and Experience*, Philadelphia: Temple University Press. Chap. 33 "Time", Cambridge.
15. McTaggart, J.M.E. (1927) *The Nature of Existence*, Chap. 33 "Time", Cambridge.
16. 中山康雄 (1992) 「主観的時間のモデル理論的分析」 大阪大学人間科学部紀要 第18巻 1-25.
17. 中山康雄 (1992) 「ディスコース表示理論に基づく哲学的意味論」 科学基礎論研究 Vol. 21, No.1,

17-23.

18. Nakayama, Y. (1993) "Meaning and Discourse Representation", R. Casati and G. White (eds.) *Philosophy and the Cognitive Sciences*, Austrian Ludwig Wittgenstein Society, 367-372.
19. 中山康雄 (1994) 「意味とディスコースの理解」 科学基礎論研究 Vol. 21, No.4, 9-14.
20. Quine, W. V. (1956) "Quantifiers and Propositional Attitudes" in: *The Journal of Philosophy* 53 (5) :177-187. Also in: *The Ways of Paradox*, New York: Random House, 1966.
21. Ricoeur, P. *Temps et Récit* (1983-1985) (邦訳、久米博訳 『時間と物語』 (1988-1990), 新曜社)
22. Sartre, J.-P. (1943) *L'être et le Néant*, Gallimard (邦訳、松浪信三郎訳 『存在と無』 (1960) 人文書院)
23. Saurer, W. (1993) "A Natural Deduction System for Discourse Representation Theory", in: *Journal of Philosophical Logic* 22: 249-302, 1993.
24. Searle, R. J. (1979) "A Taxonomy of Illocutinary Acts", in: *Expression and Meaning*, Cambridge University Press, 1-29.
25. 白井賢一郎 (1991) 『自然言語の意味論』 産業図書

Time and Life — Time for an Acting Subject —

Yasuo NAKAYAMA

There are many philosophical considerations on time from the viewpoint how time is perceived by an epistemic subject. However, it is rarely discussed how time is perceived by an acting subject. This paper is a trial to describe time concerning the last question.

In the first part of this paper, the treatment of time in Heidegger's *Sein und Zeit* is discussed; this is one of few works that deal with the problem of time from the viewpoint of acting subject. One of the Heidegger's theses in this book is the thesis of the ecstatic unity of temporality (*ekstatische Einheit der Zeitlichkeit*) that can be expressed in my words: "Time appears not successively for an acting subject. Human being goes forward to its future and comes back from it. Our understanding of our being consists in positioning ourselves in this movement."

Heidegger's description of time is essential but contains also many erroneous considerations. One of his errors is his assumption that authenticity (*Eigentlichkeit*) is incompatible with "everydayness". The death plays a central role in Heidegger's "existentialist" thinking, but accepting one's own death means accepting that one is involved in a series of causal processes. It seems, therefore, that Heidegger must accept the causal structure of the world, if he accepts the death as an inevitable event of one's life. So considered, projects (*Entwurf*) can be interpreted as actions in a causal determined situation to change this situation.

How does an acting subject understand time and how does he deal with time? This is the main theme in the second part. A structure of actions is defined by using Discourse Representation Theory (DRT) that is a semantic theory proposed by H. Kamp in the early 80's. We use a simple Discourse Representation Structure (DRS) to describe what a subject intends to do in the future. A simple DRS K is called a "structure of action", if a subject acts to realize what is in K stated.

A structure of actions can be expanded by making precise the process of realizing a goal; e.g. $\langle \{e\}, \{R(e)\} \rangle$ can be expanded to $\langle \{e, e_1, \dots, e_k\}, \{R(e), B_1(e_1), \dots, B_n(e_n), e_1 < e_2 < \dots < e_k < e\} \rangle$ by describing behaviours B_1, \dots, B_n which are needed to reach the goal R . To enable to act, the subject has to position the present time into a given structure of actions. In general, the present time is included by many structures of actions, and consistency under these structures is required to realize all of them.

Here, we can come back to Heidegger's thesis of the ecstatic unity of temporality. An acting subject constructs a structure of action and positions the present time into this structure. This feature of actions corresponds to the ecstatic unity of temporality. Some actions might be distin-

guished from others by its relation to authentic existence. Many of our actions are motivated by our desire, but our action will be essential, if we act in order to be an authentic existence, where authentic existence means here to have a completely satisfied mental state.